

機能性構音障害

発音がなんだかはっきりしない。舌が短いのかな、長いのかな。治るのかな？

機能性構音障害とは・・・

日本語には「ア・イ・ウ・エ・オ」の5つの母音と、カ行音・ナ行音等の子音があります。

赤ちゃんは「ア」に近いあいまいな母音や「バ」や「マ」などの上下の唇を合わせて出す音から発音するようになり、しだいに舌の位置や動きの複雑な音も獲得していくようになります。6歳ぐらいになると、「ラ」行音や「サ」行音といった舌の先を微妙に使う音も含めて、日本語の音が完成します。

機能性構音障害とはいわゆる子供の発達障害の一種で、明らかな原因(唇や口の中の動きに障害があったり、難聴があったり、言葉の発達に遅れがあったり)が認められないのに、同一年齢の子と比べて発音だけがおかしいという場合のことをいいます。

症状

下記のようなパターンに分けられます。

1 日本語にある音に置き換わるもの

例) さかな タカナ・チャカナ らっぱ ダッパ

2 子音が抜け落ちるもの

例) ごはん ゴアン りんご インゴ

3 日本語にない音(文字では表しにくい音)に置き換わるもの

口蓋化構音

舌の先で作られるタ行音や、下の奥で作られるカ行音が、その中間くらいで作られるもの。

側音化構音

本来は舌の前の方から出る息が、舌の側面から出るもの。イ列音に現れやすい。下あごを左右どちらかにずらす癖がある人もいる。

鼻咽腔構音

鼻の奥でクンクンという音を出すもの。

声門破裂音

のどに力をいれて母音のような音を出すもの。

接し方

小さい間は上手に発音できなくて当たり前ですが、気になる場合は保健師や耳鼻科・小児科に相談するとよいでしょう。聴力・唇や舌の形や動き・ことばの発達などに異常がなければ、多くは訓練しなくてもいずれ正しい(少なくとも日本語として不便でない程度の)発音になっていきます。

ただ、発音の未発達な小さい子どもに、「チャカナではなくて、サカナって言ってごらん」などと言い直しをさせてもいっこうにうまくならないものです。かえって、おしゃべりをするたびにいちいち発音のことを指摘されると、しゃべることがおっくうになってしまう恐れがあります。ですから、発音よりもおしゃべりの中身に関心を持って、楽しく会話の相手をしてあげることが大切です。ただし、周囲の大人が子どもに合わせたつもりで「チャカナ」と誤った発音で話しかけていると、子どもは正しい発音と誤った発音を区別する機会がなくなります。ですから、子どもには正しい発音で話しかけることも大切なわけです。

そうして、4～5歳くらいになって友達にからかわれるとか、本人が気にするようになったなど不都合が出て「早く治してしまいたい」という場合は発音の訓練を開始します。

